

第 225 回研究報告会 (3月 29日)

2010 年 3 月台湾伝道史関連調査報告

佐藤浩司、深川治道

2010 年 3 月 8 日 (月) から 14 日 (日) まで佐藤浩司・深川治道の両名は、おやさと研究所伝道史料室が海外伝道調査の一環として行なっている戦前の台湾伝道を調査するため台湾へ赴いた。今回は 1937 年 1 月の中山正善二代真柱一行による台湾巡教の足跡の一部を辿った。

3 月 8 日、桃園国際空港到着後、かつて天然ガス・油田を産出した「錦水」を目指した。二代真柱は 1937 年 1 月 11 日の午後、新竹へ赴き、新竹神社参拝後、夕方天然ガス採掘見学のために錦水へ行っている。我々はまず第 1 号油井のある出礦坑の中国石油の展示館「台湾油礦陳列館」を見学、かつての錦水油井やプラント工場などに関連する展示写真をカメラに収め、敷地内に残されている油井跡などを回った。その後、錦水を訪れたが、そこに当時の姿を見出すことはできなかった。

3 月 9 日は、まず嘉義市に戦前より現在に至るまで残っている嘉義東門教会を訪問した後、終戦以前にあったもう一つの教会「嘉義教会」の所在地と推定される嘉義駅前あたりを通り、東門伝道所と近年嘉義に建てられた天理教の霊舎を訪れた。霊舎のほうは門が閉ざされていて霊園の中に入らず、門の外から眺めるにとどまった。その後、台南へ赴き、終戦以前にあった 3 つの教会—臺南教会、臺錦教会、双臺教会—の所在地と推定されるあたりを歩いて回った。台南では終戦前と後とは、地名や地番が変わってしまっており、正確な場所は特定できていないが、これらの教会は互いに比較的近い位置に所在していたようである。また、かつてこの地方の中央官庁である台南庁の庁舎もさほど遠くはない。台南庁庁舎は戦時中に空襲で大きな被害を受けたが、戦後も修復されて利用され、近年になって大規模な修復を受けて「国立台湾文学館」となっている。尚、この文学館には、かつて天理大学に留学していた卒業生が勤務しており、館内を案内してもらうことができた。

3 月 10 日は高雄から車で台湾南部を目指した。今回、二代真柱が台湾南部で訪れた箇所を全て回ることはできず、屏東市、三地門、四重溪、石門古戦跡を訪れるにとどまった。二代真柱は屏東で阿猴神社(屏東神社)を訪れた後、砂糖工場を見学し、山猪門(現在の三地門)で台湾原住民の一つであるパイワン族の部落を訪れている。我々はまず屏東市へ赴き、かつて神社のあった中山公園を訪ねた。そこでは、刻まれた文字は消されているものの幾つかの記念碑や橋など日本時代の建造物と思われるものを見ることができた。その後、かつての「山猪門」へ向かい、台湾の原住民文化などを紹介する「三地門文化園区(日本語パンフレットでは「台湾原住民カルチャーパーク」)」という施設を訪れた。そこでは 1937 年の二代真柱の台湾旅行記『台湾遊記』の口絵にあるような原住民の住居を見ることができた。昼食後、四重溪を通り、かつて西郷従道の記念碑のあった丘を登った。そこでもかつての文字は消されてはいるものの、当時の姿を偲ばせる記念碑の姿が残されている。そこから石門古戦場、牡丹社事件跡地まで行ったところで夕暮れとなってしまうので高雄に引き返した。

3 月 11 日は列車で台東へ向かった。二代真柱が来訪した当時は、南回りの鉄道はまだなく、台東までは自動車と一部徒歩

の旅であった。そして、一行は太麻里社(『台湾遊記』では「大麻里」と大南社という二つの原住民部落を訪れているので、我々もこの二つの地域を訪れることにした。幸いチャーターしたホテルの車の運転手は原住民の歴史に詳しくあった。またその地の人々に知り合いがあったおかげで、太麻里では日本語を話すことのできるパイワン族の女性に紹介してもらえたので、家族やかつての部落の話などを聞くことができた。さらにその女性によって、親戚筋に当たるという頭目やその家族、そして頭目の家に隣接し保存されているパイワン族の伝統的な住居に案内してもらうことができた。また、その近所に戦前からある家屋へも案内され、そこに住む戦前を知る老婦人やその家族に紹介してもらった。大南社のほうは、戦後も自然災害や火災などで集落が山から里へと移動してしまっていて、二代真柱の来訪当時とは場所が異なっているようであった。また、地名も災害が続いたため「大難」に似た発音の「大南」から現在は「東興」という名前に変わっているということであった。

3 月 12 日は台東から列車で花蓮へ行った。駅へ行く前に、タクシーでかつての台東神社と推定される忠烈祠と、現在は使われなくなったものの古跡として保存されている旧台東駅を訪れた。二代真柱一行はここから夜行で花蓮(当時は花蓮港、『台湾遊記』では「花蓮港」と表記)に行ったものと思われる。一行の花蓮到着は早朝にもかかわらず、多くの人々の出迎えを受け、教会で洗面後、朝 6 時に神社に参拝をしている。この神社は現在忠烈祠となっていて、『台湾遊記』の記述の通り、橋を渡って「数多い石段」を登ったところにあった。しかし、在りし日の神社を偲ばせるものは、当時のままだという馬の像だけであった。その後、花蓮在住で、天理大学別科日本語課程の卒業生に協力してもらい、かつて花蓮にあった「天理教臺花教会」を探したが、所在地を特定することはできなかった。そこで、二代真柱は花蓮で日本人が入植して作った「吉野村」を車で一巡しているので、そこを訪れることにした。吉野村は現在の「吉安郷吉安村」で、現在も吉野村開村の記念碑が残っていた。

3 月 13 日は、列車で宜蘭へ向かった。ここには二代真柱は訪れてはいないが、近年おやさと研究所の入手した戦前の台湾の市街地図に「宜蘭布教所」の所在地が記されていたので、ここを訪れた。すでに当時の教会の建物と思われるものはなかったが、そのあたりにはいくつか日本統治時代から残る建物を見ることができた。また、知人の案内で宜蘭に古くからある廟や、かつての宜蘭神社で宜蘭郊外の員山にある「宜蘭県忠烈祠」を訪れた。その後、知人の住む頭城を訪ね、ちょうどその土地の神を祀る廟で行なわれていた祭を見学した。

3 月 14 日は、台北の台湾伝道庁を参拝後、列車で桃園へ向かった。かつて桃園にも天理教の教会があったが、所在地は特定できなかった。そして、台湾でもっとも当時の神社の姿をとどめられていると言われる桃園県の忠烈祠を見学後、桃園国際空港から帰国の途についた。

今回二代真柱の足跡の一部を辿る中で、台湾の庶民の豊かな宗教文化の一端に触れることができたように思われた。また、台東では原住民の方から直接お話を伺うことができたことは望外の収穫でもあった。それは台湾でこの調査に協力しお世話してくださった方々や、旅の途上で出会った台湾の方々の親切のおかげであった。

新所長紹介

深谷 忠一

(ふかや ちゅういち)

1945年生まれ。天理中学卒業後、渡米。1968年、カリフォルニア大学ロサンゼルス校文学部卒業。青年会本部委員、道友社編集主幹、海外部詰、天理大学選科日本語課主任等を歴任。1979年、アメリカよふき布教所長。1984年、天理教やまとよふき分教会長（2008年まで）。1994年、パシフィックウエスタン大学宗教学名誉博士号取得。1999年より教化育成部で基礎講座や三日講習会の立ち上げに関わった後、2004年に学校法人天理大学専務理事となる。2010年4月1日付で天理大学おやさと研究所長に就任。



主な論文・著作に「いさみの神学」（『みちのとも』1972年）、『青年布教操典』（共著）天理教青年会本部出版部（1974年）、『十柱の神様の御守護の理』天理教やまとよふき分教会（1998年）、『親神様』教化育成部（2007年）など。国内はもとより、アメリカ、中南米をはじめ世界各国で天理教教理に関する講演、講義、放送等多数。

連載執筆者紹介

土井幸宏（どい ゆきひろ）

オーストラリア通信

おやさと研究所研究生、一れつ会扶育生としてオーストラリアの首都キャンベラにあるオーストラリア国立大学大学院音楽学部修士課程研究科に派遣留学中。北部準州中央砂漠地帯ラジャヌ先住民居住区でのフィールドワークや同州アーネムランドのガーマ祭への参加を通して、オーストラリア先住民アボリジニの宗教と音楽の変容を研究中。ワルピリ族でのスキンネームは Jungarrayi（ジュンガライ）。

Tenri International Conference 2010

標記コンファレンスを2010年3月26日（金）に、天理大学研究棟で、「Life, Death, and Dying in Intercultural Perspective」をテーマとして開催した。このプロジェクトは、堀内が2009年1月、インドで開かれた国際学会に出席した際、ヨーロッパ中部・スロベニアのリュブリャナ大学で東洋哲学および東洋思想を専門とするマヤ・ミルチンスキー教授と交流を持ったことがきっかけとなった。ミルチンスキー教授の「『生死』



めぐるワークショップを天理大学と共同開催したい」との要望を受け、帰国後、研究所で協議し、この要望を受けることになった。開催に当

たり、長く「死生学」の研究を続けている島藺進東京大学大学院教授に、当日のコメントを依頼した。

プログラムは以下の通り。

Session One : Comparative Perspectives on Death

Midori Horiuchi ; “Death from a Tenrikyo Perspective”

Miran Bozovic ; “Death in Early Modern Metaphysics”

Session Two : Life and Death in East and West

Yoshitsugu Sawai ; “Meanings of Life and Death in Asian Religious Traditions : A Semantic Perspective of Religion”

Maja Milcinski ; “Death as a Soteriological Problem: Faith, Myth and Reason”

Comments : Susumu Shimazono

Discussion

Closing Speech : Akio Inoue

冒頭、生死をめぐる研究の意義とその目的について簡単な趣旨説明を行ったミルチンスキー教授は「この機会が、両大学の交流を深める第一歩になってほしい。こうした重要なテーマの研究会を、天理教の祭典日に、そして天理大学を会場に実施できたことは、宗教学的にも大変意義深いと思う」と述べた。

今回リュブリャナ大学からは、発表したミラン・ボゾヴィック教授、マヤ・ミルチンスキー教授のほか、アナ・ペーヴェラキュアさんが議論に加わった。3人は、リュブリャナ大学哲学科に所属し、近年は、この方面に特化した研究プロジェクトを推進しているが、スロベニアにおける自殺者の多さがこの研究の問題意識の一つであると、ミルチンスキー教授の発表で述べられていた。

また、クロージング・スピーチにおいて、井上昭夫所長（当時）は、人間の死だけでなく、動植物や地球環境そのものの「死」を考察の対象に入れることで、より深い生と死の議論が展開されていくだろうと述べた。（文責：堀内）



アルゼンチン・ベネズエラ出張報告

野口 茂

2月27日から3月21日までの間、南米アルゼンチンおよびベネズエラを訪ね、両地域における宗教動向の調査にあたった。アルゼンチンでは、現地の天理教関係者からのご理解ご協力をいただき、教会や布教所でのおたすけ活動を参与観察。また参拝者に対して入信の経緯や教理理解、信仰実践等に関する聞き取り調査を行うとともに、それらを補完する目的で、各地でアンケート調査表を配布し、拠点長にその回収を依頼した。

一方ベネズエラでは、近年発展の著しいある日系宗教と、ブラジルから流入したユニバーサル教会の二つに注目し、教会での参与観察や信者への聞き取り調査に努めた。

家庭の崩壊^{地雷} 虐待^{格差社会} DV 孤独死 戦争 難民 AIDS 老々介護 環境 核兵器 フルエ 貧困自殺 CO₂ 新型インフルエンザ 温暖化 南北問題 砂漠化 社会破壊

現代社会と天理教(1)

天理大学 おやさと研究所 平成22年度公開教学講座

世界が大きく激動している今日、私たちの価値観や身の回りの生活もしだいに変化し、いつのまにか多様な価値観が生まれてきました。しかしその価値観は、ややもすると利己的な価値観となって、「我さえ良くば、今さえ良くば」の風潮を拡大・助長する危険性をもたらしています。そのような現代社会の中で、私たちが日々考え行動する拠り所は、常に天理教の教えに基づくことは言うまでもありません。この講座では、「現代社会と天理教」というテーマのもと、2年間にわたって天理教の教えに基づき生き方、行動のあり方を、現代社会における具体的事例の中から考えていきたいと思ひます。

第1講 4月25日(日)
井上昭夫 「谷底せりあげ」とユートピア
アフガン・アフリカでの「谷底」せり上げの実体験を映像を通して語ります。ユートピアの「高山」を極めた共産・資本主義もいまや地獄相に陥っています。そこで現代宗教のユートピアの有無とその行く末を予測してみたいと思ひます。

第2講 5月25日(火)
澤井義則 道に道あり
「ちばも鏡なら、世上も鏡」。今、私たちは、どのような姿を「世上の鏡」に映し出していく必要があるかについて考えてみます。

第3講 6月25日(金)
堀内みどり 白紙に戻って一より始める
男女共同参画という理念の実現を目指している現代社会で、天理教婦人会設立百年を迎えることの意味を考えてみます。

第4講 8月25日(水)
岡田正彦 情報化社会と「たすけ合い」
ポスト・モダン、後期資本主義、情報化社会などと呼ばれる新たな社会状況のもとで、これから求められる「宗教」のあり方を模索しながら、天理教の教えに基づき人間の生き方の意義について考えていきたいと思ひます。

第5講 9月25日(土)
幡鎌一弘 教えの足もとを照らす
温故知新。先人たちは、常に「現代社会」と向き合ってきました。向き合いつつ、教えを磨いていたのです。歴史を振り返ることで、私たちの今を考えます。

第6講 10月25日(月)
澤井義次 生かされて生きる一生の意味論—
中高年層の自殺の増加など、現代社会が抱える諸問題も射程に入れながら、筆者がこれまで探究してきた「生の意味論」を理論的に展開し、現代社会における天理教の教えに基づき人間の視座を提示したいと考えています。

第7講 11月25日(木)
宮田元 陽気ぐらしの世界をめがけて
いろいろな問題が起こっている中で、現代社会は大きな変化を見せつつあります。このような現代において、「元の理」をてがかりとし、常に変わらぬ教えを広く深く掘り下げつつ、あらためて私たちの生き方を探ります。

場所：天理教道友社 6階ホール
時間：13:00～14:45
* お車での来場はご遠慮下さい。

グローバル天理
第11巻 第5号 (通巻125号)

2010(平成22)年5月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 深谷忠一
編集発行 天理大学 おやさと研究所
〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <http://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

Printed in Japan